令和７年１月１８日

プ ロ グ ラ ム

1. **開会**　　１４：００

2. **プログラムⅠ**　　１４：００～１４：１５

役員・会員合同総会

１）　総会議事

２）　その他

3. **プログラムⅡ**　一般講演　１４：１５～

座長　　島根大学医学部泌尿器科学講座　　**和田　耕一郎**

１．「性感染症患者におけるパートナーへの感染告知と自己効力感の関連についての文献検討」

岡山大学学術研究院保健学域 大学院保健学研究科看護学分野　　**細井　舞子**

２．「島根県東部地区の地域中核病院泌尿器科における男性尿道炎の臨床的検討」

島根大学医学部泌尿器科学講座　　**井上　圭太**

３．「よこやま腎泌尿器科クリニックにおけるマイコプラズマ尿道炎の臨床的検討」

よこやま腎泌尿器科クリニック　　**横山　光彦**

４．「性感染症の現状と課題」（一般演題とは趣旨が異なるため受賞審査対象外）

島根大学医学部泌尿器科学講座　　**和田　耕一郎**

休　憩

4. **プログラムⅢ**　特別講演　１５：３０～

座長　　島根大学医学部泌尿器科学講座　　和田　耕一郎

「*Mycoplasma genitalium* 感染症ー今、話せること」
演者：新小倉病院　副院長・泌尿器科部長　濵砂 良一先生

5. **閉会・表彰**　　１６：３０～

一般講演（プログラムⅡ）　抄録集

１.「性感染症患者におけるパートナーへの感染告知と自己効力感の関連についての文献検討」

細井　舞子（岡山大学）、仲瀬克己（吉備国際大学）

本研究の目的は、性感染症患者（以下、患者）のパートナーへの感染告知（以下、感染告知）に関連する要因として感染告知にかかる自己効力感（以下、自己効力感）に着目し、患者への効果的な支援内容を検討することである。方法は学術論文を対象としたナラティブレビューとし、患者自身が行う感染告知を検討した研究のうち、自己効力感との関連を検討した研究を整理した。2024 年 11 月の検索時点において 2000 年から 2024 年までに発行された文献を CHINAL、PubMed および MEDLINE により検索した。「sexually transmitted infections」AND「partner notification」AND「self efficacy」、「sexually transmitted infections」AND「partner referral」AND「self efficacy」および「sexually transmitted infections」AND「contact tracing」AND「self efficacy」を検索ワードとし、重複を除いて 29 件を抽出した。さらに、性感染症を取り扱っていないもの４件、専門家を対象としたもの 2 件、MSM を対象としたもの 1 件、感染告知と自己効力感の関連を分析していないもの 12 件、解説 1 件を除外し、9 件をレビュー対象とした。レビューの結果、調査年は 1998 年～2022 年であり、研究デザインは横断研究が 4 件、コホート研究が 5 件であった。調査対象の性別は男性および女性、ライフステージは思春期および成人期であり、米国を始め多様な地域で実施されていた。感染告知と自己効力感の高さに有意な関連が見られた研究は 7 件であり、うち５件は感染告知の有無を、2 件は感染告知の意図を評価指標としていた。感染告知を推進するには自己効力感を高める介入を行うことが有用であると考えられた。

２.「島根県東部地区の地域中核病院泌尿器科における男性尿道炎の臨床的検討」

井上　圭太（島根大学）

【目的】島根県東部の地域中核病院における男性尿道炎とその関連疾患の発生・受診状況と治療経過を把握するために当院泌尿器科で淋菌・クラミジア PCR 検査を施行した症例について後方視的に検討した。
【対象と方法】2015 年 4 月から 2024 年 6 月に当科外来で性行為感染症（STI）を疑い淋菌・クラミジア PCR 検査を行なった 26 名、平均年齢：30.6 歳（19-48）、29 検体を対象とした。初尿や尿道分泌液を用いた PCR 法にて淋菌・クラミジアを同時に検出し、臨床所見と比較・検討した。
【結果】淋菌性尿道炎は９例、その内でクラミジアとの混合感染は４例にみられた。非淋菌性尿道炎の内、クラミジア尿道炎は１１例、非淋菌性非クラミジア性尿道炎を 9 例に認めた。初回治療失敗例はクラミジア尿道炎で 2 例に認められた。そのほか、３例が初回治療後に再診せず経過不明であった。
【考察】男子尿道炎から検出された原因微生物の頻度は諸家の報告と比較して矛盾しない結果であった。初回治療失敗となったクラミジア尿道炎については初回治療で使用した Azithromycin 再投与で軽快に至ったことから耐性菌ではなく再感染等が考えられた。経過不明となった３例を除き全例で治療により症状・検査所見に改善が見られるため現時点で耐性菌の明らかな増加を思わせる傾向は乏しいと考えられた。症例数が同地区のクリニックから近年行われた発表と比較して 10 分の 1 以下と極端に少ないが、地域中核病院とクリニックで性的活動が活発な若年男性の受診のしやすさに差が生じた可能性があるのではないかと思われた。

３.「よこやま腎泌尿器科クリニックにおけるマイコプラズマ尿道炎の臨床的検討」

横山　光彦（よこやま腎泌尿器科クリニック）

目的：当院を受診しマイコプラズマ尿道炎患者と診断、治療した患者の検討を行った。方法：当院でTV/MG検査が開始となった2022年8月から2024年10月末までに当院を受診し、尿中マイコプラズマが陽性であった男性134例を検討した。結果： 134名中、治癒確認が行われた患者は59名44%であった。初期治療としてドキシサイクリン（DOXY）を59名に投与後、再診なし12名、内服後再燃または陰性化せず34名、症状改善後再診なし2名、陰性確認8名と有効率は19.0%であった。ミノサイクリン（MINO）を44名に投与後、再診なし15名、内服後再燃または陰性化せず16名、陰性確認12名、 副作用が 7名にあり3名は内服継続できなかった。有効率は43%であった。シタフロキサシン（STFX）を12名に投与後、再診なし1名、無効11名であった。2次治療として、DOXY無効後STFX投与21名中陰性11名再診なし10名、MINO無効後STFX投与9名中陰性9名、STFX無効後MINO投与6名中陰性2名、MINO無効後MINO+STFX投与3名中陰性2名であった。結論：初期治療ではMINOがDOXY、STFXより有効であったが単独では概ね有効率は低かった。MINO　DOXY2週間後にSTFX1-2週投与の有効性が高い印象であった。